

## 幼稚園教育実習に関する一考察

後藤 嘉余子

(昭和55年9月30日受理)

### A Study of Teaching Practice in Kindergartens

Kayoko GOTO

(Received September 30, 1980)

#### I はじめに

保育の場で幼児との直接的接触をもつ保育者は心理的環境を構成する重要な要因として重視され、保育の本質から或いは実際の側面からその理想像の提示がなされている(山下<sup>1)</sup>, Symonds<sup>2)</sup>, 他)。この理想像をめぐる保育者の資質論が展開され、同時に必要な資質を具えているかどうかという所謂適性に関する問題が保育者養成の不可欠な課題となっている。

保育者の資質、適性に関するこれまでの実証的研究を養成との関連で概観すると、人格と職業との関係から保育学生の人格特性と他専攻学生のそれとを比較して保育者として必要な資質を明らかにし、更に、養成期間内にみられる変化について論及するという方向と(白佐<sup>3), 4)</sup>, 光岡<sup>5)</sup>, 他)、保育者に必要と考えられる多数の事項について保育学生等に指摘された必要度から資質を抽出し(最近は因子分析を用いた検討もなされている<sup>6)</sup>)、教育の過程における指摘事項の相違を意識の変容として捉えようとする方向等が見受けられる。菱谷らは、保育者の資質がどのような重みをもって教育実習評価の対象となっているかを明らかにするため、実習評価と意識調査、性格検査等の関連について調べ、評価と意識調査との間に有意性を見出している<sup>7)</sup>。また、適性という観点からは、久保らが保育専攻生を対象に教師による適性評価、実習評価、性格、運動能力等相互の関係を検討している<sup>8), 9), 10)</sup>が、保育者という職業にとって必要な資質であるといわれる身体的能力を取り上げている点に注目される。ところで、資質、適性について考察する際、何らかの

形で実習の評価が規準とされることが多々みられる。保育現場での実習は、他の実験実習教科に比して保育者養成課程におけるもっとも現場の体験的学習である。保育者形成という観点に立てば、それは実習する学生にとっても重要な意味をもつことになり、従って実習の評価は成果としての重みづけがなされ、適性等を追究する場合の一つの規準に汎用されるのである。しかしながら、幼稚園における教育実習には多様な保育理念、異なった経験、種々の指導等複雑な側面がうかがわれ、視点の異なる評価を把握する上での問題が論じられている。実習への意欲、実習態度、終了後の意識の変容を考えると、他者評価と併せて学生自身の自己評価を通した検討を加えることも必要であろう。

近年多岐に亘る実習研究の中で、学生の意識、態度に及ぼす実習の影響を効果として捉えようとする方向がみられるが、実習経験の多様性に考慮を払い、その中に共通して獲得するもののあることを推察し、実習の効果測定に関して客観的把握を試みているものに角尾の研究がある<sup>11)</sup>。また、立川は学生自身の変容をもとに、実習時の困惑を保育者志望の度合と実習経験との関連で考察し、実習後の指導のあり方に言及している<sup>12), 13)</sup>。

このような実習状況を踏まえた追究がなされている点にも着目して、本稿では実習による学生の意識の変容を手がかりに、実習効果という観点から保育者としての自己評価、保育者の必要な条件に指摘された事柄、実習による習得事項について分析を行ない、同時に保育現場から要請される保育者の条件にも考察を加え、実習指導に資することを目的とするものである。

## II 研究の方法

### 1. 調査対象

対象とした学生は、東京家政大学児童学科4年及び短期大学部保育科2年の1970～1974年度における幼稚園教職課程履修者であるが、そのうち調査に協力した1972～1974年度の354名分の資料を主として用いた。年度別内訳は1972年度の大学生22名、1973年度大学生59名、短大生188名、それに1974年度の大学生21名と短大生64名である。また、保育者としては、都内並びに近県の幼稚園に勤務する園長、主任教諭を含む教員で、保育者の条件について回答のあった160名を対象とした。

### 2. 調査方法

教育実習に関する調査は、先ず実習開始前の年度当初に質問紙によって第1回調査を実施し、実習の全過程が終了した時点で再度同様の調査を施行した。いずれの場合も30～50名程度を集団とし、教育実習指導の時間内で一斉調査を行なった。調査票への記入は全て記名による。結果の処理に当っては多肢選択形式の整理の他に、自由記述部分を短文に分解して整理、分類した。なお、対象者の性格特性を把握し、実習による意識、態度の変容を検討する基礎資料にするため、初回調査時にY-G性格検査も併せて実施した。

また、保育者としての自己診断については、実習前及び第1次実習（観察・参加を主とした2週間の実習）終了後、更に、2週間の総合的な第2次実習直後（全実習過程終了後）の3回に亘って自己評定を求めた。評定には肯定的評価から否定的評価まで5～1点を与え、実習前後、第1次・第2次実習終了時の2つの観点よりそれぞれの評定を比較検討した。

一方、保育者に対しては園を介し無記名郵送法で回答を求めたが、調査自体は他種目的のもので、その中より保育者の条件に関する記述部分を取り上げ整理した。

### 3. 調査項目の作成

#### 1) 幼稚園教育実習に関する調査

1970～1971年度にかけて、①幼稚園教職課程履修の動機、②保育者観、③保育者として具えるべき条件、④適性感、⑤志望職種とその選択理由、⑥実習による習得事項、⑦実習前に学んでおくべきこと、⑧実習に対する期待・不安、⑨実習で困惑したこと、⑩実習実施方法に対する要望について予備調査を行ない、その結果をもとに各事項の調査項目を作成した。回答方法は多肢選択形式

を主としたが、⑧、⑨、⑩は自由記述形式とし、他の事項においても自由に記述する余地を設けた。また、⑥を実習前調査で可能性という観点からの設問にした以外は、実習前後の調査共同一項目を用いた（⑨は実習後調査のみ）。本稿ではこれらのうち、③、⑥の2事項を分析の対象とする。

#### 2) 保育者としての自己診断票

西本による保育者の自己診断表<sup>14)</sup>を参考に、保育者としての資質の評価、保育の実績に関する評価という2視点から実習の段階を考慮して18乃至29の評価項目を設定した。それを実習前、観察・参加実習後、全実習終了後の各時点に適した設問に修正し、「非常に優れている、非常によくやっている、非常によく知っている」、「優れている、よくやっている、よく知っている」から「普通である」を経て「少々劣っている、あまりやっていない、あまり知らない」、「非常に劣っている、全くやっていない、全然知らない」に至る5件法で回答するように構成した。

#### 4. 調査時期

実習前調査は実習実施年度の4～5月、従って本稿の対象者の場合は1972～1974年4～5月、実習後（第2次実習終了時）の調査は同年度の1～2月、即ち、1973～1975年1～2月、同様に第1次実習終了後の自己評定は1972～1974年の7月或いは9月である。また、保育者への調査は1974年9月から1975年3月にかけて行なった。

## III 結果と考察

### 1. 保育者像にみられる実習経験の影響

保育者観の形成に教育実習経験は何らかの影響を及ぼすであろうとの視点に立ち、未だ観念的に保育を学習している時期と、実習によって保育の実践を体験した時点における意識の変容を手がかりに検討を試みた。即ち、保育者として具備すべき条件について、予備調査に基づき便宜的に身体的外見の要件に関するもの、性格特性に関するもの、専門的知識・能力に関するもの、保育態度・技術に関するもの、保育者としての自覚に関連したものという5つのカテゴリーを設定し、それぞれ7項目ずつ合計38項目（その他として3項目追加）より成る選択肢を設けて実習の前後に回答を求めた。

1973年度の対象者から得た結果をみると、表1のように、実習前においては、概して明朗である、協調性があ

表1 保育者に望まれる条件

	大 学 生				短 大 生			
	実習前		実習後		実習前		実習後	
	F	%	F	%	F	%	F	%
身体的外見的要件に関するもの	38	15.90	28	13.21	276	14.14	92	13.24
性格特性に関するもの	76	31.80	65	30.66	842	43.14	224	32.23
専門的知識・能力に関するもの	52	21.76	44	20.75	353	18.08	124	17.84
保育態度・技術に関するもの	52	21.76	68	32.08	344	17.62	212	30.50
保育者としての自覚に関連したもの	17	7.11	4	1.89	70	3.59	26	3.74
その他	4	1.67	3	1.42	67	3.43	17	2.45
計	239	100.00	212	100.01	1952	100.00	695	100.00

る、責任感が強い等性格特性に関連する条件が多く挙げられ、次いで幼児の発達状態の理解が十分である、ピアノ等基礎的機能が優れている、観察力があるといった専門的知識・能力に関するもの並びに幼児に愛情をもち遊びの中に入れる、幼児の興味・意欲を起させて誘導出来る、公平で個人的感情に支配されない等保育態度・技術に関する条件が指摘されている。一方、実習後の調査では、大学生、短大生共保育態度・技術に関するものを性格的条件と同様に強調しており、条件の重視程度には実習前のそれと有意な差が認められる(大学生： $\chi^2(5)=11.790, p<.05$ , 短大生： $\chi^2(5)=57.538, p<.001$ )。そこで、各カテゴリー別に実習前後の件数を比較すると、大学生の場合保育態度・技術に関する条件が実習後に重視され、保育者としての自覚に関連した条件、例えば使命感がある、責任を自覚している、保育に対する意欲をもつというような項目は、逆に被選択数が減じている(それぞれ  $\chi^2=6.125, p<.05$ ;  $\chi^2=12.922, p<.001$ , いずれも  $df=1$ )。同様に、短大生も保育態度・技術に関するものを実習終了後多く指摘する傾向にあるが、性格特性に関する条件は実習前に比して低率であることがうかがわれる( $\chi^2=51.247, p<.001$ ;  $\chi^2=25.339, p<.001, df=1$ )。

このように、実習を契機に保育者としての条件を規定するに当たって、その人格的側面からのみならず、保育の場における幼児との関わりを考慮しながら指導的側面にも重点をおいた検討がなされるということは、教育実習経験の効果を示すものと看做してよいであろう。殊に、それが保育実践の体験を通して実感的に指摘されているだけに注目に値する。こうした傾向は、実習前の調査において、短大生が性格特性に関連した条件を特に重視していることから大学生以上に顕著であるといえよう。また、保育者としての自覚に関する条件にみられた回答件数の減少は、その必要性の欠如を意味するのではなく、

むしろ実習後においても観念的理解の域を脱しきれず実感としての把握がなされなかったこと、或いは保育者としての自己像との関連によるものと考えられ、このような側面の養成の困難さが感じとれる。

なお、実習前後の各時点で選択された項目数の平均を比べると、大学生では大差はないが(実習前4.1項目、実習後3.6項目)、短大生の場合実習後に件数が半減し、約4項目の指摘に留まっている点も興味深い(実習前10.4、実習後3.7)。

## 2. 実習による習得事項

実践体験によって直接或いは間接的に学びとったものは何であろうか。実習前に期待し、目標とした事柄との関連を踏まえ、実習が効果的に作用する側面について考察を加えた。

実習経験を通して習得事項として回答のあった事柄を、実習前において学習可能と予想した事項と併記したのが表2である(対象は1973年度の学生)。一般に、幼児への愛情と理解、幼児の実態の把握、幼児に対する興味の増大、観ることの重要性、個と集団の指導法、具体的場面における指導の技術、指導計画の立案・実施等幼児との関わりに関連した事項並びに保育の技術に関する事柄が挙げられており、実習前の目標と習得事項とは略同一の傾向を示している。しかし、短大生の場合両者の比率には多少の相違がみられ( $\chi^2(8)=20.597, p<.01$ )、保育者としての基本的なあり方に関連する事柄及び適性、自己研鑽、生き方等実習生自身の問題を中心としたものは予想を上回り、教職観、職務内容・園の理解に関する項目では指摘の減少がうかがわれる(それぞれ  $\chi^2=7.859, p<.01$ ;  $\chi^2=4.812, p<.05$ ;  $\chi^2=3.964, p<.05$ , いずれも  $df=1$ )。

教育実習という現場の体験的学習のもつ特殊性に着目すれば、幼児との接触に関わる事項並びにそれに伴う具

表2 実習による習得事項

	大 学 生				短 大 生			
	実習前		実習後		実習前		実習後	
	F	%	F	%	F	%	F	%
外見的要件に関連すること	2	2.33	2	1.56	4	1.25	7	1.82
人格特性に関連すること	3	3.49	5	3.91	9	2.81	19	4.95
専門的基礎的知識・技能に関すること	7	8.14	17	13.28	39	12.19	40	10.42
幼児との接触に関すること	25	29.07	31	24.22	91	28.44	93	24.22
保育の技術に関すること	25	29.07	37	28.91	112	35.00	127	33.07
保育観の確立に関連すること	2	2.33	6	4.69	4	1.25	2	0.52
保育者としての基本的なあり方に関すること	13	15.12	24	18.75	25	7.81	56	14.58
教職・職務内容・園の理解に関すること	9	10.47	6	4.69	30	9.38	21	5.47
適性、生き方等自己の問題を中心としたこと					6	1.88	19	4.95
計	86	100.02	128	100.01	320	100.01	384	100.00
平均選択項目数	1.5		2.2		1.7		2.0	

体的な指導の方法・技術等の習得については事前にその可能性を一定程度予測し得るが、保育者としての実感は実践体験を通して獲得されるものであり、保育への熱意、責任の自覚、保育者のチームワーク、親との協力の必要性といった保育者の基本的なあり方に関する側面の習得に実習の影響を認めることが出来る。また、件数は少ないが、短大生にとって実習は自己を内省する場であるともいえる。即ち、幼児、保育者との触れ合いの中で自己錬磨し、保育者としての適性を自己評価するのみならず、生き方についても何らかの示唆を受けているであろうと思われる。反面、職務内容の理解、園の実態の把握に関

する事柄は、実習期間内では所期の目標に達し難い側面として捉えられていると解釈出来るよう。

他方、大学生にみられた事前の予想と習得事項との類似性は、保育所実習等他種実習経験の累積による効果、短大生との教育内容・学習状況の相違等によるものと考えられる。また、習得事項として選択された項目数が実習前の目標と比較してやや増加する傾向がうかがわれるが、特にそれが大学生に顕著であることにも留意しておきたい。

### 3. 保育者としての自己評定

#### 1) 実習前後における評定の比較

表3 実習前後における自己評価得点

項 目	大 学 生					短 大 生					
	実習前		実習後		実習前×実習後 t	実習前		実習後		実習前×実習後 t	
	$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		
保育者としての 資質の評価	健康である	4.00	0.74	3.34	0.71	-3.905***	4.20	0.84	3.43	0.63	-8.988***
	清潔感がある	4.14	0.59	4.25	0.80	0.744	4.08	0.80	3.71	0.79	-3.957***
	言語表現が的確である	3.57	0.72	3.55	0.66	-0.156	3.61	0.75	3.49	0.80	-1.489
	明朗である	3.80	0.84	4.05	0.80	1.635	3.87	0.81	3.66	0.86	-2.684**
	誠意がある	4.18	0.68	3.95	0.74	-1.567	4.08	0.76	3.92	0.85	-1.848
	受容的である	4.11	0.65	4.05	0.74	-0.488	4.21	0.64	3.98	0.76	-3.041**
	協調的である	3.95	0.56	3.86	0.76	-0.629	3.95	0.70	3.65	0.82	-3.489***
	積極的である	4.00	0.60	3.89	0.80	-0.744	4.01	0.75	3.69	0.82	-3.853***
責任感がある	3.86	0.69	3.86	0.69	0	3.92	0.75	3.85	0.84	-0.829	
保育実績に 関する評価	保育観の確立	3.89	0.71	3.75	0.83	-0.769	3.79	0.76	3.65	0.76	-1.603
	幼児に対する愛情	3.80	0.73	3.77	0.73	-0.135	3.76	0.73	3.63	0.75	-1.533
	幼児との接触	4.05	0.71	3.95	0.82	-0.562	4.04	0.74	4.04	0.80	-0.074
	保育者としての自覚	3.93	0.65	3.55	0.66	-2.948**	4.04	0.73	3.41	0.76	-7.725***
	専門的知識	3.70	0.69	3.43	0.62	-1.737	3.74	0.72	3.26	0.64	-6.372***
	幼児の理解・掌握	3.57	0.69	3.30	0.50	-1.861	3.29	0.54	3.39	0.71	1.436
保育環境への配慮	3.93	0.69	3.66	0.67	-2.015	3.88	0.77	3.71	0.80	-1.952	

\*\*\*P<.001 \*\*P<.01

実習による自己変容の追求を目的とし、実習開始前及び全過程終了後の2度に亘って「保育者としての自己診断票」に自己評定を求め、それぞれの時点での共通項目について両者の比較を試みた。1973年度の対象者のうち、資料の整った大学生44名、短大生164名分の項目別評価得点の平均値を表3に示す。

実習経験による評価得点の変動は容易に予測されるが、実際に実習後の評定を開始前のそれと比べた場合、全体に得点が下降しており、殊に短大生に著しいことがうかがわれる。即ち、大学生では健康、保育者としての自覚の2項目に、短大生には健康、清潔感等外的資質といわれる項目、また、明朗性、受容性、協調性、積極性のような性格特性に関する項目、加えて保育者としての自覚、専門的知識の追求・応用等全項目の半数以上に得点の低下が認められる。このような傾向は、実習経験を通して保育者としての外的資質及び性格の側面の重要性を意識し、自らを再認識すると共に、使命や責任の自覚、幼児・保育に関する専門的知識・技能の習得について自己反省をもたらした結果であろうと推察され、前述の実習習得事項と相俟って実践体験の反映を示すものとして注目される。特に、保育者としての自覚は体験の累積によって深められる側面と考えられるので、実習後の評価得点に自己への再評価となって顕われていると推測出来る。

また、実習前後の評定を得点別に分類し、その分布状態を概観すると、両時点における得点差が有意であった前述の項目に加えて、大学生の場合は清潔感、協調性といった項目に、短大生では言語表現、幼児の理解・掌握の両項目に得点分布の差がみられ(それぞれ $\chi^2(2)=10.279, p<.01$ ;  $\chi^2(2)=6.667, p<.05$ ;  $\chi^2(3)=8.812, p<.05$ ;  $\chi^2(3)=9.427, p<.05$ )、しかも清潔感、幼児の理解・掌握には低率ながら5点段階の比率に上昇傾向が認められた( $\chi^2=4.911, p<.05$ ;  $\chi^2=6.571, p<.05$ , いずれも $df=1$ )。これらの項目について得点別比率の推移を示すと次のようである。

清潔感：5点	実習前	25.00%	→	実習後	47.73%	
(大学生)	4点	実習前	63.64%	→	実習後	29.55%
	3点	実習前	11.36%	→	実習後	22.73%
協調性：5点						
(大学生)	4点					
	3点					
言語表現：5点						
(短大生)						

	4点	45.73%	→	29.88%
	3点	38.41%	→	50.61%
	2点	5.49%	→	6.71%
幼児理解：5点		1.83%	→	7.93%
(短大生)	4点	28.05%	→	28.66%
	3点	67.68%	→	57.93%
	2点	2.44%	→	5.49%

以上のことから実習前後の評価得点にはかなりの変動がうかがわれ、実習に対する学生の姿勢にも多様性を看取出来るが、実習終了時までの時間的経過に伴う諸要因の影響(例えば他種実習経験の影響、学習状況の相違)並びに実習段階、実習園の指導態勢、即ち、幼稚園側の保育方針、実習生への関与度等を検討する必要があると思われる。特に短大生に関しては、得点の動揺が著しいことに考慮を払い、評定時における教職への認識程度、年齢的・心理的特徴にも留意すべきであろう。なお、言語表現、幼児の理解・掌握というような項目に大学生、短大生共2度の評定で低い評価がなされたことは、実習体制の現状を示すものとして一考を要する問題といえよう。

他方、実習前に実施したY-G性格検査の結果をみると、プロフィールの類型には大学生、短大生いずれもD型(それぞれ40.68%, 35.23%), A型(30.51%, 21.24%)が多く、E型は1割に満たない程度である(5.08%, 9.33%)。C、B型は中間的存在で15%前後を占めているが、大学生の場合、B型はE型と同様に少ないという特徴が見受けられる(C型：大学生 15.25%, 短大生 14.51%, B型：8.47%, 19.69%)。D、A、C型の存在率から推して、全体的傾向としては情緒的に安定し、社会的に適応した好ましい性格特徴を示していることがうかがわれ、先述の実習による変容について考えるとき、望ましい保育者としての方向性を期待出来るものと思われる。

## 2) 実習状況による評定の相違

保育者としての自己評価は、実践体験の内容との関連も考慮に入れる必要がある。そこで、観察、参加、実習の過程でみられる評価得点の変動を検討するため、完全資料の得られた1972~1974年度の学生(大学生65名、短大生228名)を対象に、第1次、第2次実習後の評価結果について分析を行なった。

表4は、両時点における共通項目の平均評価得点を示したものである。第1次、第2次の評定を比較してみる

表4 実習段階別評価得点

項 目	大 学 生					短 大 生				
	第1次		第2次		1次×2次 t	第1次		第2次		1次×2次 t
	X	SD	X	SD		X	SD	X	SD	
健 康	3.91	0.70	3.38	0.69	-3.842***	3.92	0.80	3.42	0.60	-7.238***
清潔感	4.06	0.63	4.17	0.83	0.847	3.96	0.77	3.94	0.71	-0.281
言語・音声	3.45	0.68	3.49	0.66	0.428	3.47	0.71	3.61	0.70	2.215*
態度(落ち着き, 温かさ等)	3.75	0.66	3.82	0.78	0.528	3.83	0.77	3.95	0.74	1.638
明朗性	3.65	0.79	3.88	0.77	2.027*	3.64	0.79	3.74	0.80	1.494
誠実性	4.02	0.73	3.92	0.83	-0.753	3.92	0.76	4.05	0.77	1.881
受容性	4.00	0.63	4.06	0.72	0.518	4.00	0.77	4.23	0.71	3.207**
協力・融和性	3.78	0.59	3.80	0.79	0.174	3.79	0.70	3.86	0.71	1.003
積極性	3.85	0.61	3.82	0.82	-0.246	3.72	0.71	3.93	0.75	3.169**
責任感	3.77	0.65	3.78	0.73	0.158	3.79	0.74	3.86	0.75	0.991
園の保育方針の理解	3.75	0.68	3.80	0.81	0.342	3.64	0.70	3.81	0.77	2.355*
幼児に対する愛情と理解	3.74	0.71	3.82	0.74	0.597	3.57	0.73	3.86	0.74	4.237***
幼児との接触	3.89	0.73	3.95	0.81	0.457	3.93	0.82	4.12	0.75	2.663**
保育者としての立場の意識	3.82	0.63	3.57	0.70	-2.193*	3.82	0.74	3.50	0.62	-4.642***
保育研究に対する興味・熱意	3.66	0.64	3.40	0.63	-2.192*	3.62	0.74	3.48	0.70	-1.947
幼児の発達・行動の理解	3.49	0.64	3.26	0.53	-2.066*	3.35	0.61	3.39	0.62	0.651
保育環境への配慮	3.83	0.71	3.65	0.64	-1.544	3.77	0.72	3.74	0.68	-0.617

\*\*\*P&lt;.001 \*\*P&lt;.01 \*P&lt;.05

と、大学生の場合明朗性、健康、保育者としての立場の意識、幼児の発達と行動の理解、保育研究に対する興味・熱意の5項目に差が認められ、しかも明朗性を除いて得点が低下している点に注目される。他方、短大生には外的資質である健康、言語・音声といった項目、また、性格特性に関連する項目としての受容性、積極性、更に、幼児に対する愛情と理解、保育者としての立場の意識、園の保育方針の理解・尊重、幼児への接触等を加えた凡そ半数の項目に変化がうかがわれる。これらの項目のうち、健康、保育者としての立場の意識以外は、大学生と異なり第2次においていずれも高く評定されている。

健康の重要性を認識し、保育者としての立場を自覚するという事は、実習の段階が進むに従い部分実習、全日実習の機会が増加して、主体的行動が要求されることに関連があると考えられる。殊に保育者としての立場の意識については、観察者や補助者の域から実際に保育の主体者となって行動するようになると指導的側面を考慮する必然性が生じ、その結果自己に対して厳しい評価をもたらしたものと思われる。こうした傾向は、更に、幼児の発達・行動の理解、保育研究に対する興味・熱意と

というような項目に大学生の評価得点の下降がみられたことから、短大生よりもむしろ大学生に顕著であるといえよう。このような保育態度・技術に関する事柄は、大学における学習内容と相俟って保育にどの程度関わるかという問題に関係し、実践の場で主導権をもつ機会を経験することによって培われる側面であることがわかる。一方、短大生に認められた評価得点の上昇は、実習の過程で幼児への接触が間接的から直接的へと移行するのに伴い、幼児に対する興味の強化とその理解が深められることに基づくものと推察される。このことは、短大生の多くが、日常幼児と接する機会の比較的少ない現状を考えても容易に理解出来る傾向であろう。なお、言語・音声、幼児の発達・行動の理解、保育研究への熱意等の項目は実習過程における評価が一般に低く、実習という限定された体験では習得し難い側面として、実習前後の評価結果と同様注目に値する。

次に、実習に影響を及ぼすと考えられる要因のうち、一例として実習園側の受入れ態勢の問題を取り上げてみたい。

実習生指導の計画、養成校への意見・要望、学生の実

習記録等を参考にして、実習の段階を考慮し、比較的標準的な受入れ状況を構成していると思われる幼稚園(N)と、それ以外で、実習段階に配慮しながらも園の特色を生かした指導態勢をとる場合(S)とに大別し、実習段階との組合せで実習状況を4種に分類した。即ち、I群：第1次、第2次共にN、II群：第1次N、第2次S、III群：第1次S、第2次N、IV群：第1次、第2次共にSである。この実習状況別に第1次、第2次全共通項目の平均評価得点を表5に示した。実習段階と状況の2要

表5 実習段階別状況別平均評価得点

	大学生				短大生			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV
第1次 $\bar{X}$	3.88	3.87	3.76	3.58	4.01	4.07	3.59	3.58
SD	0.73	0.69	0.67	0.62	0.76	0.75	0.72	0.71
第2次 $\bar{X}$	3.78	3.51	4.02	3.69	3.90	3.63	4.06	3.65
SD	0.76	0.69	0.74	0.85	0.70	0.72	0.70	0.76
N	18	19	15	13	15	65	73	75

因から分散分析を行なった結果、大学生の場合いずれも有意な差はみられなかったが、短大生では実習状況と交互作用が有意であった(表6)。そこで、実習状況別に実

表6-a 実習段階と状況の分散分析  
—大学生の場合—

変動因	SS	df	MS	F
実習段階	0.016	1	0.016	0.031
実習状況	1.345	3	0.448	0.865
交互作用	1.726	3	0.575	1.110
誤差	63.232	122	0.518	

表6-b 実習段階と状況の分散分析  
—短大生の場合—

変動因	SS	df	MS	F
実習段階	0.001	1	0.001	0.001
実習状況	4.464	3	1.488	2.817*
交互作用	7.911	3	2.637	4.991**
誤差	236.698	448	0.528	

\*\*P<.01 \*P<.05

習段階における差を検討すると、II群は第1次、III群では第2次の得点が高く(それぞれ  $t(64) = -3.448, p < .01$ ;  $t(72) = 3.803, p < .001$ )、I群及びIV群には有意差が認められなかった。I群の得点が第1次、第2次共に高いことを勘案すると、比較的標準的な指導態勢の下で高評価する傾向がうかがわれ、幼稚園側の受入れ態勢が実

習段階以上に評価得点への影響をもたらすものと推測出来る。殊に、短大生には実習時の状況が、保育者としての自己評価を方向づける要因となり得ることを示唆しているのは興味深い。保育職に対する意識・態度の形成過程において教育実習のもつ意味の重要性を考えると、実習生の所属(大学、短大)、経験等と併せて実習状況をも考慮する必要がある。

4. 幼稚園側の求める保育者の条件

実際に現場で幼児の保育活動に携わっている幼稚園教諭並びにその指導的立場にある園長、主任教諭は、将来の保育者にどのような条件を求めているのであろうか。保育者として共に活動することを想定した場合の特に要望する条件として指摘されたものを、上位15位まで表わしたのが表7である。

表7 園側の要望する保育者の条件

	件数	%
健康である	84	52.50
明朗である	81	50.63
誠実である	29	18.13
保育に対する熱意がある	25	15.63
ピアノが弾ける	21	13.13
協調性がある	18	11.25
責任感がある	15	9.38
人格が円満である	15	9.38
思想穏健である	15	9.38
努力する	14	8.75
勤務の継続性がある	14	8.75
温和である	13	8.13
素直である	12	7.50
研究心が旺盛である	10	6.25
勤勉である	8	5.00

%は回答者数に対する比率を示す

回答総数404件のうち、明朗である、誠実である、協調性がある等性格特性に関するものは最も多く191件、47.28%を占め、次いで、健康であるといった外的資質に関するもの84件、20.79%、以下保育に対する熱意がある、研究的である等保育の態度に関するものが61件、15.10%、保育の技術に関するもの(ピアノが弾ける、音楽・絵画の特技がある)27件、6.68%、勤務の態度に関するもの(継続性がある、他)22件、5.45%の順に挙げられ、知識・能力に関するもの(専門的知識、教養、常識がある等)は19件、4.70%にすぎない。具体的にみると、健康、明朗であることを基底条件とし、誠実で協調

性に富み、保育への熱意があり、且つピアノが弾けること等が要請され、少数ではあるが、勤務の継続性の指摘もうかがわれる。

健康という身体的条件は他の職業においても不可欠なものであるが、とりわけ保育者にとってはその職務内容に鑑みて強調される適性条件である。従来からそれは「健康で正常な身体<sup>15)</sup>」、「機能障害のないこと」、「精神的な健康」、「健康で明るい人<sup>16)</sup>」等と保育者の必要条件に挙げられていることから考えても最も基本的な条件といえよう。また前述のように、実習の過程で健康に対する再評価がなされたことは、幼稚園側の要望を裏付けるものとして注目される。しかしながら、要望事項の多くが人格論的、職業人的レベルの問題であることは保育者養成上留意すべき点であろう。換言すれば、保育活動は全人的な未分化な活動であるが故に、保育者像における人間的基礎が重視されるといわれるが、ここでは保育者養成のあり方、即ち、幼稚園側の養成校に対する期待の程度を表わすものとして捉えることの方が妥当のように思われる。

## V 要約

教育実習を通してみられる学生の意識、態度の変容を実習の効果的側面と考え、保育者の条件として指摘された事柄、実習による習得事項、保育者としての自己評価という視点から実習過程における相違について比較検討を行ない、併せて保育現場より要請される保育者の条件に若干の考察を加えた。その結果の概要は以下の通りである。

1. 保育者の具えるべき条件としては、概して性格的条件が多く指摘されているが、実習後保育態度・技術に関する条件を同程度に重視する傾向がみられ、指導的側面に重点をおいた検討がなされるところに実習経験の反映がうかがわれる。

2. 実習による習得事項には、一般に、幼児との接触及びそれに伴う保育技術に関する事柄が挙げられている。しかし、短大生は保育への熱意、責任の自覚等を事前の目標以上に捉えており、このような側面にも実習の影響を認めることが出来る。

3. 実習前後の自己評定を比較すると、健康、保育者としての自覚等の項目に得点の下降がうかがわれ、殊に、それは短大生に顕著であった。このような傾向は、実習経験によって健康の重要性を意識し、使命や責任を自覚

して自己反省をもたらした結果であろうと推察される。

4. 実習の過程でみられる評価得点の変動を検討した結果、健康、保育者としての立場の意識等の項目では、実習の段階が進むに従い逆に得点が低下している。これは、観察的、補助的域から主体的立場の行動が増加するのに伴って、指導を考慮した再評価がなされたことによるものと考えられる。また、短大生には、幼児への直接的接触による興味と理解の強化により、幼児に対する愛情、幼児との接触、積極性等の評定に上昇が認められた。

5. 評価得点と実習段階及び実習園側の受入れ態勢との関連については、比較的標準的な実習状況において高い評価がなされており、特に、短大生の場合、受入れ態勢が実習段階以上に自己評価を方向づける要因となり得ることが示唆された。

6. 幼稚園側の要望する保育者の条件をみると、健康、明朗、協調的、保育への熱意がある、ピアノが弾ける等所謂人格論的職業人的レベルの問題が殆どであった。件数は少ないが勤務の継続性と併せ、保育者養成上留意すべき点であろう。

7. 保育者としての自己評定は、評価項目の検討も含め、実習前から終了時までを一連の過程として捉えた上で得点の変動に関する考察を加える必要がある。また、得点の分布状態からかなりの個人間動揺がうかがわれ、実習に対する姿勢に多様性が看取されるので、変容をもたらす要因の分析を行なうことも今後の課題である。

## 文 献

- 1) 山下俊郎：新版保育学概説 厚生閣 1972
- 2) Symonds, P. M. : Personality of the teacher. *Journal of Educational Research*, 40, 652—671 (1947)
- 3) 白佐俊憲：保育者志望学生の性格特性について 臨床心理学研究, 8, 111—118 (1969)
- 4) 白佐俊憲：保育者志望学生の性格変化について 社会福祉研究, 9, 28—34 (1971)
- 5) 光岡摂子, 石井美晴：保育者の資質に関する研究 その2 保育者志望学生にみられる性格特性 日本保育学会第25回大会研究発表論文集, 2-108 (1972)
- 6) 鈴木隆男：保育者の資質に関する研究(1) 日本保育学会第33回大会研究論文集, 538—539 (1980)
- 7) 菱谷信子, 藤野和子, 中島貴子：保育者の資質について —教育実習評価にみられる保育者像について— 日本保育学会第29回大会研究論文集, 92 (1976)



- 8) 久保玄次, 会津力, 田中健吾: 保母の適性に関する研究(1) —精神作業検査, 体力テストおよび実習評価からの一考察— 日本保育学会第30回大会研究論文集, 45(1977)
- 9) 久保玄次, 会津力, 田中健吾: 保母の適性に関する研究(2) 適性評価と性格・体力との関係 日本保育学会第31回大会研究論文集, 490—491(1978)
- 10) 久保玄次, 会津力, 田中健吾: 保母の適性に関する研究(3) 運動能力と適性評価・性格との関係 日本保育学会第32回大会研究論文集, 310—311(1979)
- 11) 角尾和子: 教育実習の効果について一考察 日本保育学会第31回大会研究論文集, 512—513(1978)
- 12) 立川多恵子: 幼児教育課程における実習研究Ⅱ 日本保育学会第31回大会研究論文集, 506—507 (1978)
- 13) 立川多恵子: 保育者養成のための実習指導Ⅲ (実習効果の研究) 日本保育学会第33回大会研究論文集, 548—549(1980)
- 14) 西本脩: 幼児は保育でどう変わったか 保育診断講座Ⅲ 黎明書房 1964
- 15) 西本脩: 幼児教育者としての適性 幼児教育大系第2巻第3分冊 国土社 1959
- 16) 山下俊郎: 前掲書  
<付記>  
本稿の一部は, 「幼児教育者の適性に関する研究」として日本応用心理学会第42, 43, 45回大会(1975, 1976, 1978)において発表した。調査実施に当ってご協力いただいた幼稚園の先生方, 学生の皆様に深謝いたします。